

移牧の過去の文化遺産化：トルコ地中海 地方の定住化したヨリュク的事例から

Heritage-Making of the Semi-Nomadic Past in the Case of
Yörüks Who Adopted Sedentary Life in Mediterranean Turkey

田 中 英 資

1. はじめに

地中海地域で広く行われてきた牧畜のあり方に、高地と低地の気候の差異を利用して季節的に移動しながら家畜を飼育する移牧（transhumance）がある。この地域の夏は、ほとんど雨が降らず、乾燥している。強い日差しがふりそそぎ、40度を超える高温になることも多い。一方、冬は曇りがちで気温もかなり下がり、雨や雪が降る日も多くなる。そこで、夏は暑さや乾燥を避けて冷涼で過ごしやすい山間部で家畜を飼育するが、冷え込みが厳しい冬は降雨だけでなく積雪もある山間部から低地に家畜を移動させて飼育するのである（谷 1996 [1976]: 12）。季節により家畜を移動させるため、移動先のはことは、冬営地、夏営地、秋営地などと呼ばれる（谷 1996 [1976]: 12）。移牧によって飼育される家畜は地域差もみられるが、多くの場合、羊、山羊、牛である（白坂 2012: 21-22）。

地中海地域における移牧には、何千年にも及ぶ非常に長い歴史があると考えられている。先行研究においても、移牧はこの地域の「伝統」的な生業として捉えられてきた（例えば、Campbell 1964; Pitt-Rivers 1971 [1954] など）。また、伝統的生業としての移牧や移牧にまつわる慣習は、移牧民であるとい

うアイデンティティ、ジェンダー規範と結びつけられることで「生かされ」、再生産されてきた点も指摘されている (Herzfeld 1985)。

しかし、こうした「伝統」的生業は、20 世紀以降、近代化の波にさらされている。移牧民たちは移牧をやめて農業を始めたり、都市部に移住したりするようになり、移牧を続ける人びとの数は急減しているといわれている。1980 年代までに出された地中海地域における民族誌的研究においても、「近代的」「都市的」な生活様式が、移牧民を含めた山間部の共同体の間に広まることで生じている社会変容に目が向けられ、そうした「伝統的」な生活文化は変容しつつあるものとして記述されている (du Boulay 1994 [1974]; Herzfeld 1985; 谷 1996 [1976]; 松原 2004 [1998] など)。

ここで注意しておきたいのは、これらの先行研究が出されてから既に 30 年以上経っている点である。「伝統」的な生業である移牧をやめ、「近代」的な生活文化を取り入れた人びとは現在、どのような生活をしているのであろうか。本稿では、筆者がこれまで調査を行ってきたトルコ地中海沿岸の観光保養地において現在は農業や観光業に従事する、かつての移牧民を事例として、移牧をやめた人びとの「その後」の状況を報告する。

本稿のもとになった調査は、もともと移牧の状況について研究することを目的としたものではなかった¹。筆者は近年、トルコ地中海地方の遺跡周辺に暮らす人びとが、それら遺跡やこの地域の過去・歴史をどのように捉えているのか、特に観光開発との関わりから検討することを目的に、この地域に暮らす人びとに聞き取り調査を行ってきた。しかし、滞在先のゲストハウスの経営者家族や、村長など、調査で筆者が関わった人びとの多くが、かつて移牧に従事していた、あるいは、その親世代が移牧を行っていたという話をしてくれた。それを通して、彼らの過去の捉え方を理解するうえで、移牧民 (ヨリュク) であった過去が重要であることがわかってきたのである。な

¹ 本来の調査題目は、「トルコにおける考古遺跡の遺産化と観光資源化に関する社会人類学的研究」(JSPS 科研費 26870789) であり、本調査のなかで、かつてのヨリュクたちが遺跡周辺の観光産業に関わっていることが明らかになってきた。

かでも、彼らの間でヨリユクであったことを積極的に評価し、自分たちのアイデンティティの核として位置づけようとする、ある種の過去の資源化（参考 森山 2007）が行われていることがみえてきた。そこで、本稿では、トルコ地中海地方でかつて移牧に従事していた人びとに焦点を当て、彼らが移牧の過去をどのように捉えているのかを検討する。本稿は、先行研究をふまえてこれまでの調査内容を整理し、今後の研究の方向性を定めることに主眼をおいた中間報告的なものである。

2. トルコ系移動牧畜民ヨリユク (Yörük) について

アナトリアのトルコ系移動牧畜民ヨリユク (Yörük) を扱った先行研究に、1970 年代末から松原正毅がアンタルヤ (Antalya) 県東部からその北側に位置するウスバルタ (Isparta) 県において移牧を行っていたチョシル・ヨリユクに関する民族誌的研究がある (松原 2004 [1998])。本章では松原の研究をもとにトルコ系移動牧畜民ヨリユクに関してその歴史的背景をまとめたうえで、近代国民国家トルコ共和国の政策がヨリユクの伝統的な生活様式にどのような影響を与えたかについて概観する。

2-1：歴史的背景

トルコ共和国内で季節移動を行なうトルコ系牧畜民は、「ヨリユク」や「チュルクメン (Türkmen)」と呼ばれる。ヨリユクとは、「歩く人、放浪者」という意味で、トルコ語で「歩く」を意味する動詞 “yürümek” の派生語である²。これに対して、「チュルクメン」は、中央アジアからアナトリアにかけての

² 松原正毅 (2004 [1998]) は、“Yörük”を「ユルック」と表記しているが、現地の発音に近い表記は「ヨリユク」であると筆者は考えるため、本稿では「ヨリユク」と表記する。また、松原はヨリユクのことを「遊牧民」と呼んでいるが、ヨリユクたちの牧畜は季節ごとに定まった移動先があり、そこに家畜を移動させていく生活様式であるため、本稿では「移牧」とよぶことにする。

ユーラシア大陸南西部に広く分布する民族名称としても使われている（松原 2004 [1998]: 13）。なお、中央アジアからイランを経てアナトリアに移動したトルコ系移動牧畜民のうち、北部に移動したグループは「チュルクメン」と呼ばれ、アナトリア南部に移動したグループが「ヨリユク」と呼ばれるようになったという説もある（松原 2004 [1998]: 13）。

実際のところ、筆者がトルコの地中海地方で調査した経験の範囲では、自分たちのことを「もともとはヨリユクだった」と語る人びとにはよく出会ったのだが、そうした人びとが「チュルクメン」という言葉を使うことはほとんどなかった。また、ヨリユクという言葉で「牧夫」を意味するチョバン (*çoban*) と言い換えて使われているのを調査中に見聞きした。また、ヨリユクについて聞き取りを始めた頃、話題のなりゆきで、ヨリユクの伝統的な衣装を着せてもらったことがある。その時以来、衣裳を着せてくれたインフォーマントが知人に筆者を紹介する際には、「この人は日本人のヨリユクだよ。(*Bu Japón yörük*).」と、冗談めかして話すようになった。さらなる聞き取り調査を行う必要はあるが、チュルクメンとヨリユクという言葉の使い分けについて、筆者が接したトルコ地中海地方の人びとの間では、ヨリユクという言葉はトルコ人であるということを前提として使われており、職業の名称に近い言葉として使われていると考えられる。

一方、「チュルクメン」は、古代トルコ史にあらわれ、中央アジアからイランに達し、アナトリアに侵入したオウズ (*Oğuz*) 族の別称ともされている（松原 2004 [1998]: 13）。チュルクメンという言葉が史料に現れるのは 11 世紀頃からで、「イスラームを信仰するトルコ人 (*Müslüman Türk*)」が訛ったものなど、その語源についても諸説あるようだ（松原 2004 [1998]: 14）。

オウズ族は 7 世紀にモンゴル高原に成立した突厥帝国を構成した部族の 1 つとされており、8 世紀半ばに、突厥帝国を滅ぼしたウイグル族との抗争に敗れて、モンゴル高原から西方への移動を開始した（松原 2004 [1998]: 14-15）。彼らは、10 世紀頃にアラル海付近に到達し、イスラーム化していったとされている（松原 2004 [1998]: 15）。そのなかの一派が勢力を伸ばし、

11世紀にはイラン東北部のホラサーン地方からイランに入って、セルジューク朝をうち立てた。

セルジューク朝は西進してビザンツ帝国との抗争を繰り返して、1071年のマラズィギルトの戦いに勝利したことをきっかけにアナトリアへの進出を開始する。1078年にはセルジューク朝の王族によって、アナトリアにルーム・セルジューク朝が成立した。これらの一連の動きのなかで、放牧地を求めるトルコ系牧畜民によるアナトリアへの移動が繰り返されるようになり、それとともにアナトリアのイスラーム化が進んだというのが、一般的なアナトリアとトルコ系民族の関わりに関する歴史認識である（参考 Kafadar 1995）。

さて、オウズ族は24の支族に分かれていたが、そのうち23支族の名称がアナトリアの地名や部族名のなかに残っているという（松原 2004 [1998]: 16）。後に地中海地域の大部分を征服する大帝国となったオスマン朝の始祖オスマン1世も、こうしたかたちでアナトリアに移動してきたオウズ族の一派の出身であった（松原 2004 [1998]: 15-16）。伝承によれば、13世紀の前半、オスマン1世の祖父シュレイマン・シャーは、モンゴル帝国に追われるようにホラサーンからの西進を開始し、アナトリア東北部に移動したという。モンゴル帝国の猛威が去ると、部族の一部はホラサーンへの帰還を目指して東に移動したが、さらに西に移動し、ルーム・セルジューク朝から冬営地をもらって定着した残留組からオスマン1世が現れたとされている（松原 2004 [1998]: 16）。こうした歴史的背景から、ホラサーン地方からアナトリアへの移動の記憶を語り伝えているヨリュクも多いという（松原 2004 [1998]: 16）。

ここまで述べてきたようなかたちでヨリュクの歴史を捉えることは、アナトリアで行われてきた移牧をトルコ民族中心にみているという点で、注意が必要である。「はじめに」で述べたとおり、地中海地域における移牧は非常に長い歴史をもった生業である。トルコ共和国の国土の大部分を占めるアナトリアも例外ではなく、古代から移牧が行われていた。そのため、中央アジアからイランを経て移動してきたトルコ系の牧畜民がアナトリアに定着する

なかで、移牧を持ち込んだとはいえない。また、トルコでは、アナトリアに移動してきたトルコ系民族が数千年の歴史をもつアナトリア諸文明を融合したと捉えて、現代トルコ人はアナトリア諸文明を受け継いだ存在であるとみる歴史観も、考古学を中心に根強い（参考 田中 2017）。ヨリユクの歴史記述は、アナトリアとトルコ系民族の関係をいかに位置づけるかという歴史観をめぐる問題が絡んでくるため、当事者であるかつてのヨリユクたちの語りも含め、さらなる検討が必要である。

2-2：定住化の進展

松原によれば、従来、多くのヨリユク人口を抱えていたのは、トルコの東南部のシャンルウルファ（*Şanlıurfa*）からマルディン（*Mardin*）にかけてとトルコ西部のアイドゥン（*Aydın*）周辺、地中海沿岸沿いのアダナ（*Adana*）からアンタルヤにかけての地域である（松原 2004 [1998]: 16）。ただ、ヨリユクの人口に関する正確な統計調査はなく、トルコ共和国が成立した1923年前後のヨリユクの人口は、約30万人から100万人と幅がある（松原 2004 [1998]: 16）。そして、その数は減少の一途であるといわれてきた。松原は、調査していた1970年代末から80年代の時点ですでにトルコ共和国成立時にヨリユクだった人びとの90パーセント近くが移牧をやめて定住生活を始めたという見積もりを示し、さらに減少傾向にあると述べている（松原 2004 [1998]: 16）。

ヨリユクたちは、チャドウル（*çadır*）と呼ばれるテントを組み立てて暮らしていた。チャドウルは世帯のニュアンスをもつ言葉でもあり、ヨリユクの社会の最小単位とみることでもできる。1つのチャドウルに2世代から3世代の6人から8人の家族（トルコ語では“*aile*”）が暮らしており、このチャドウル単位で移牧が行われてきた（松原 2004 [1998]: 376-377）。それぞれのチャドウルは、父系の親族集団を構成するが、それらが集まった、移牧民たちのいわば「村」にあたる単位のこと、マハッレ（*mahalle*）と呼ばれている（松原 2004 [1998]: 380）。

マハッレより上位の集団単位は、アシレット (*aşiret*) といい、氏族 (クラン) に相当する (松原 2004 [1998]: 380)。アナトリアのヨリユクたちはオウズ族 24 支族の系譜を引くという伝承があるが、ヨリユクのアシレット名のなかには、その系譜をたどりようがないほど変化したもの、たとえ系譜をたどれる名称だとしても、それがどう伝わったのかを明らかにすることは難しくなっているという (松原 2004 [1998]: 380)。松原が調査したチョシル・ヨリユクの場合、ホナムル・アシレット (*Honamlı Aşireti*) に属している。なお、地中海地方では、ヨリユクという語自体がアシレットの意味合いで使われることも多い (Aksoy 2004: 170)。

オスマン帝国の時代まで、それぞれのアシレットは首長にあたるベイ (*bey*) によって統轄されていた (松原 2004 [1998]: 381)。西洋的な近代化が進められるオスマン帝国の末期からトルコ共和国成立期にかけて、アシレットではなくアシレットの下位のマハッレが行政的な単位としてみられるようになっていく (松原 2004 [1998]: 381)。トルコ共和国成立後、マハッレのまとめ役としてムフタル (*muhtar*) を選挙で選ぶムフタル制が本格的に施行された。これは、ヨリユクのマハッレを 1 つの村と見立てる地方自治体制である。集団をまとめる長となるムフタルは、マハッレを超えて行政的な権限を行使することはできないため、ヨリユクたちの組織的なまとまりがマハッレ単位に分解され、結果的にベイの持っていたアシレットの構成員に対する伝統的な支配力を弱めることになった (松原 2004 [1998]: 382)。

ムフタル制の導入は、トルコ政府によるヨリユクの伝統的な社会組織を解体し、定住化を進めていく政策の一環である。ヨリユクたちの生活領域の一部である山間部は、徴税や賦役、兵役等といった国家の支配権力が届きにくく、中央政府にとって様々な摩擦の温床になるとみなされてきた (松原 2004 [1998]: 388)。そのため、オスマン帝国の時代においても、中央政府は時に強硬的にヨリユクたちの定住化を進めていた。これがトルコ共和国に受け継がれ、さらに強化されていくことになったのである (松原 2004 [1998]: 389)。

1934年6月には定住化法 (*No. 2510 İskan Kanunu*) が制定され、アシレットのベイ制度は廃止され、それぞれのアシレットが慣習法的に所有権や使用権を認められてきた土地は国有財産とされた (松原 2004 [1998]: 389)。上述のムフタル制の導入は、定住化法によって、オスマン帝国時代からのアシレットの社会組織や既得権が法的に否定され、解体されたことと関わりが深い。その後、この定住化法はいくつかの細目に関して改正が行われ、さらに強化されていった (松原 2004 [1998]: 389-390)。これを背景に、1950年には、マハッレ単位になったとはいえヨリユクの伝統的な社会組織の温存につながっていたムフタル制も廃止された。マハッレ単位でムフタルが管掌していた出生・死亡などの人口移動の業務は冬营地としていた村や町に移管され、マハッレのムフタルの行政リーダーとしての役割が剥奪されただけでなく、ヨリユクの人びとがどこかの固定した村や町の一員になることが義務づけられた (松原 2004 [1998]: 382)。ただし、政府の対応は地域によって変わり、チャドゥルではなく、強制的に家を建てさせて定住を強要することもあるれば、無償あるいは非常に安価で土地を提供して入植を薦めるようなこともあったという (松原 2004 [1998]: 382)。これらのヨリユクに対する中央政府の定住化政策は、ヨリユクの伝統的な社会組織基盤を破壊し、彼らの定住化を進める大きな引き金となった。

中央政府による定住化政策に加えて、農業の機械化と、1956年に制定された森林法 (*No. 6831 Orman Kanunu*) がヨリユクの定住化を進めた直接的な要因として挙げられる (松原 2004 [1998]: 391)。1950年代、トルコではマーシャル・プランに基づくアメリカの支援を受けながら、農業の機械化が急速に進み、大型トラクターの農村地域への導入が進んだ。これにより、人力では耕作が難しかった荒れ地やヨリユクが慣習法的に放牧地として使用してきた土地の耕地化が可能となった (松原 2004 [1998]: 391)。それとともに、土地利用をめぐるヨリユクと農民のもめごととも頻発するようになったという (松原 2004 [1998]: 391)。すでにみたように、政府がヨリユクの定住化を進めていたこともあり、公的権力の支持は農民側にあった。結果として、ヨリユクの

放牧地はせばまり、放牧にあたっては、様々な規制や条件がつけられるようになった（松原 2004 [1998]: 391）。一方、森林法は、山岳地帯の土地を国有化し、土地利用の規制を強化する法令である。これによって、国有林内での家畜の放牧は原則として禁じられたため、ヨリユクの家畜が植林地内へ立ち入るなどして、森林管理官とのトラブルも多くなったという（松原 2004[1998]: 392）。このほか、自動車が増えて交通量が増加したことでヨリユクの移動路の危険性が増大したことや、農地の拡大による移動路の制限など、移牧の継続を難しくする要素が連鎖的にあらわれて、定住化を選ぶヨリユクが年々増えていったのである（松原 2004 [1998]: 392）。

定住の道を選んだヨリユクたちの多くは、宿营地やその近くの村に家畜を売って得た金で土地を買って家を建て、農業に従事するようになった。家を建てて定住してからもしばらくは移牧を続ける者もあったが、ほとんどは完全に定住化し、別の職に就くようになったという（松原 2004 [1998]: 394）。なかにはアンタルヤなどの都市にでて、移動生活の経験をもとに運送業を始める者もいたようである（松原 2004 [1998]: 394）。

松原が調査していたチョシル・ヨリユクの場合、ムフタル制が廃止された1950年時点で移牧生活を続けているチャドゥルは76あったが、1979年の調査の時点では15にまで減少し、その中には家を建てている者もいた（松原 2004 [1998]: 396）。一方、ヨリユクたちが定住した地点は、アンタルヤ県の1市7村、コンヤ（*Konya*）県の2村の10箇所にのぼった（松原 2004 [1998]: 396）。

松原がチョシル・ヨリユクの生活を調査してから、40年近い月日が流れている。近年、さらに多くのヨリユクが定住化し、伝統的な移牧を行なう人びとは非常に限られるようになってきているといわれている。また、その間のトルコは幾度となく政治的・経済的な危機を迎えながらも経済発展を遂げてきた。なかでも地中海地方は、海岸部を中心に、都市部のトルコ人だけでなく外国人観光客にも人気の高い保養地として観光産業が発達しており、地域社会の変容は続いている。定住化したヨリユクたちはこうした変化のなか

でどのように暮らしているのだろうか。筆者が調査のなかで出会ったかつてのヨリユクたちの事例からみていく。

3. 定住化したヨリユク

松原が調査したチョシル・ヨリユクは、トルコ地中海地方の中西部に位置するアンタルヤ県の東部で移牧を行っていたが、筆者が事例として取り上げるのは、アンタルヤ県の西端に位置する、人口約 1,000 人の村ゲレミシュ（*Gelemiş*）に暮らす定住化したヨリユクである。本章では、ゲレミシュの成り立ちや定住化後の暮らしについて述べる。

3-1：ゲレミシュ村について

トルコ西部地中海地方のアンタルヤ県は山々が海岸線までせり出す地形が多いテケ半島がその大部分を占めている（図表 1）。20 世紀半ばまで海岸部に点在する漁村を結ぶ幹線道路はなく、海岸部に暮らす人びとは漁港から漁

図表1 トルコ西部地図



港へボートで移動していたといわれるほどである。また、山間部には山羊や羊の移牧がイスラーム化以前から盛んであった。「テケ (*teke*)」という名前自体、雄山羊を意味するトルコ語からきており、「山羊の多い土地」を意味している。

1960年代以降、トルコ政府は、農業の近代化を図りながら、この地域の移牧民たちの定住化を進めていった。それと並行して、農作物の輸送などを目的に、政府はテケ半島の海岸線を縦貫する幹線道路の整備を進めた。結果的に発展し始めたのが観光産業である。幹線道路によりテケ半島海岸部の漁村や町が結ばれたことで、その周辺に都市部のトルコ人たちの別荘地や観光保養地の開発が急速に進んだ。特に1980年代から、テケ半島海岸部をめぐるボートツアーが「青き航海 (*Mavi Yolculuk*)」と呼ばれて人気を博すようになった (Keyder 2004)。こうした動きのなかで、農業を始めたかつての移牧民たちは、トルコの都市部だけでなく、発展するこの地域の観光産業にもトマトやキュウリといった農作物を出荷することで生計を立てるようになっていった。また、観光開発の中心となった海岸部では、目的にディベロップに土地を売る者も多く、カシュ (*Kaş*) やカルカン (*Kalkan*) のように、漁村が保養地として急速に発展した例も多い。後述するように、定住化したヨリュクたちのなかにも、観光産業に従事する者がでてきている。

ゲレミシュも、この地域でヨリュクの定住化が進んでいた1961年に行政単位として成立した村である。ただし、ゲレミシュがある場所の歴史自体は非常に古く、古代にはパターラ (*Patara*) と呼ばれる都市が栄えていた。考古学的調査によれば、この地には青銅器時代から人が住んでいた痕跡があり、ヘロドトスなど古代ギリシャの歴史家は、この地にアポロン神の聖域があったと記している (Işık 2011: 16-18)。紀元前2世紀には、都市国家パターラは地域の貿易港として繁栄していた。特に、テケ半島の諸都市とリュキア同盟³を結び、その同盟の中心都市の1つとして同盟の議事堂が置かれていた

³ リュキア (Lycia) とはこの地域の古名である。

ことで知られている (Işık 2011 : 19)。ローマ帝国やビザンツ帝国の支配下においても、パターラは地域の中心都市としての地位を維持した。また、初期キリスト教においても重要な都市であった。パターラの司教は、リュキアの代表として数々の公会議に出席していたほか、サンタクロースのモデルとされるミュラの聖ニコラス (270 年頃～345 年または 352 年)⁴ の出身地としても有名である (Işık 2011 : 22)。

しかし 6 世紀以降、戦乱や疫病の流行でパターラの衰退が始まった。記録によれば、16 世紀までにパターラは放棄されたようである (Işık 2011: 24)。その結果、都市の遺構の大部分は砂に埋もれてしまった。18 世紀から 19 世紀頃にこの地域を旅行したヨーロッパ人の旅行記には、パターラには誰も住んでおらず、ヨリユクの冬営地として使用していることが記されている (Yılmaz 1996: 8)。

次節でみていくが、パターラの遺跡周辺は、1961 年にゲレミシュ村となり、8 家族のヨリユクが家を建てて移住している。彼らは移住当初は移牧も続けていたが、1970 年代半ばごろまでに移牧をやめ、農業だけに従事するようになっていった。

1980 年代後半になると、村民のなかに観光産業に従事する者もでてきた。村の観光開発のきっかけは、ゲレミシュの中心から約 3km 離れた、かつてのパターラの遺跡の先に広がる全長 18km の砂浜のビーチである (図表 2)。1960 年代から 70 年代にはほとんど知られていなかったが、1980 年代後半以降、このビーチがヨーロッパで出版される旅行雑誌に隠れた穴場として紹介されるようになり、ビーチを目的にゲレミシュを訪れる観光客が増え始めたのである (Işık 2011: 24)。1986 年にゲレミシュで最初のゲストハウスがオープンしたあと、ゲストハウスやホテルが相次いでオープンし、村の観光開発が急速に進んだ (Morrison and Selman 1991: 118)。

⁴ 聖ニコラスはローマ帝国支配下のパターラで生まれ、後に同じリュキア地方の都市ミュラ (Myra) の司教となった。

図表2 パターラのビーチ



(撮影：筆者 2014 年 8 月)

しかし、同時期にパターラの遺跡で発掘を本格化させようとしていた考古学者たちが 1980 年代後半からの村の観光開発の動きに歯止めをかけた。パターラの遺跡周辺はトルコ文化省によって保護区域に指定されていたが、急速な観光開発のなかで遺跡の破壊を懸念した彼らは、1990 年に政府に要請し、村での観光開発を止めさせたのである。その結果、ゲレミシュは 1980 年代までの地中海地方の典型的な村の風景がほぼそのまま残ることとなった。ただ、村の住民のなかで、所有地を外部資本に売却して利益を得ることを望んでいた者は自分たちの望むかたちで事業を拡大することができなくなったこともあり、考古学者たちとの関係はかなり険悪になったという (Işık 2011: 115)。

別稿において発掘調査の進展に焦点をあてながら村の住民と考古学者たちの関係性について検討しているが、険悪になった両者の関係は、2000 年代以降改善しつつある (Tanaka 2018)。まず、発掘調査と遺構の修復調査

の進展を通して、劇場跡や議事堂跡などが砂の下から姿を現し始めた⁵ことで、パターラの遺跡も少しずつではあるが、それまでビーチに焦点があたっていたグレミシュの観光資源として認識されるようになってきた（図表3）。また、もともとは小さな漁村だったにもかかわらず、観光開発が進んでトルコ人富裕層や外国人の別荘が立ち並ぶ人気の観光保養地となった近隣のカルカンとは対照的に、遺跡保護の名目で観光開発が止められ「手つかず」の状態のままになったことそれ自体が、「伝統的な村の生活が残る場所」という、グレミシュの魅力の1つとして考えられるようになったことも挙げられる

図表3 パターラの遺跡



（撮影：筆者 2014年8月）

⁵ 一つの例は、リュキア同盟の議事堂とされる遺構の復元事業である。リュキア同盟の政治体制は西洋民主主義の起源とみなされることから、トルコ文化観光省ではなく、トルコ大国民議会が出資して復元事業が実施され、現在ではパターラ遺跡の見所の一つとなっている（Tanaka 2018:86-87）。

図表4 1990年代初めに観光開発の止まったゲレミシュ



(撮影：筆者 2014年8月)

(Tanaka 2018: 88-89, 図表4)。

ここまで、ゲレミシュについて概観してきた。近年の観光開発においては、特に後者の「伝統的な村の生活」という観光の魅力が、村の住民たちがヨリユクとして移牧を行っていた過去に結びつけられる傾向がある。こうした移牧の過去の「遺産化」の動きを検討するために、次節ではゲレミシュにおいてヨリユクの過去がどのように語られているかをみていくことにする。

3-2：ヨリユクの過去に関する語り

ゲレミシュで語られているヨリユクの過去に関して、ここで主に取り上げるのは、現在は村でホテルを経営している M. O. 氏の語り⁶である。インタ

⁶ M. O. 氏へのインタビューは、2016年8月、2017年10月に実施した。今後もゲレミシュを訪れる際に、話を伺う予定である。

ビュー時に 60 代前半の M. O. 氏は、ゲレミシュの成立時に移住したヨリユクの家族出身である。後述するが、1970 年代半ばで移牧が廃れたゲレミシュでは、M. O. 氏を含めた 50 代後半以上の世代が、実際に移牧を経験した最後の世代ということになる。

M. O. 氏は、ゲレミシュで最初に大学に進学した人物であり、大学卒業後にフランス語を教える高校教員として 8 年近く働いた後、教員を辞めてゲストハウスを開き、観光業に従事するようになった。現在は、ゲレミシュを見下ろす高台でホテルを経営し、特に欧米人の滞在客に対して、ゲレミシュ周辺の観光地のガイド役もつとめているほか、後述する団体「リュキア出身のヨリユク、パターラ (*Likyah Yörükler Patara*)」の創始者である。また、M. O. 氏の弟 A. O. 氏は、M. O. 氏が最初に開いたゲストハウスを受け継いだほか、村内で別のホテルも経営している。さらに、10 年以上にわたってゲレミシュのムフタルに選ばれている。このように、M. O. 氏の家系は、ゲレミシュでは影響力のある家系の 1 つである。

M. O. 氏によれば、テケ半島にヨリユクが増えたきっかけは 16 世紀の前半だという。それまでこのあたりにはトルコ系の人びとはほとんどおらず、ギリシャ系のキリスト教徒ばかりであった。1527 年にオスマン朝のジェム・スルタンなる人物がこの地にやってきて、イスタンブールのスルタンに、この地にトルコ系の住民を増やすよう要請した。そこで、スルタンは、中央アナトリアのコンヤ周辺にいた 40 家族のヨリユクをアンタルヤ方面に移動させる命令を出したという。40 家族といっても、それぞれの家長には 4 人の妻がおり、それぞれ 10 人は子どもがいて、1 家族が 50 人近い大集団であった。また、それぞれの家族は、約 2,500 頭の山羊や羊、牛が 50 頭から 60 頭、荷物の運搬用に驢馬を 10 頭に駱駝を 5 頭ほど飼っていたほか、家畜の群れを守るための牧羊犬も 10 頭ほどいたという。

しかし、アンタルヤ付近は暑すぎ、マラリアも蔓延していたため、一部の家族がそこで暮らすのをあきらめて、現在のアンタルヤ市から北西の山間部にある現在のコルクテリ (*Korkuteli*) 近くにある、ヤズル (*Yazır*) 付

近に落ち着いた。それから100年ほどはその地で移牧を行っていたが、M. O. 氏の祖先たちはさらに西に進んで、現在のエルマル (*Elmalı*) 近郊のバランダ高原 (*Baranda Yaylası*) のデレボアズ (*Dereboğaz*) に移動した。バランダ高原には湧き水の出る場所が4か所⁷あり、移牧の夏営地に相応しなかったという。そして、冬営地としてヤルダー (*Yalıdağ*) と呼ばれていた現在のゲレミシュ周辺を冬営地、デレボアズとヤルダーの間にあるレンギュメ (*Lengüme*) を秋営地とした。初夏の時期 (6月初旬) にバランダ高原に移動し、秋にレンギュメへ、12月初めにヤルダーへ移動する形で移牧を行っていたという。そのため、誰かに出身を問われたら、「夏の家はバランダ高原、秋の家はレンギュメ平原、冬の家はゲレミシュ・ヤルダーだよ。 (*Yazlığımız Baranda yaylası, güzlüğüümüz Lengüme ovası, kışlığımız Gelemiş Yalıdağı.*)」と答えたのだそうだ。

M. O. 氏は、祖先がいつバランダ高原に来たのかについて、はっきりとは語らなかった。しかし、その語りは、16世紀前半にアンタルヤ地方に移住し、100年以上かけてバランダ高原に移動してきているという内容であること、また、前節でも述べたように、19世紀にパターラを訪れたヨーロッパ人の記録にはヨリュクの冬営地の痕跡の記述があることから、彼らがバランダ高原に来たのは、18世紀から19世紀にかけての時期と推測される。

デレボアズにおいても定住化の動きは20世紀前半に始まっていたと考えられる。M. O. 氏によると、1925年に初めて泥レンガの家が建てられたという。また、1936年までは、移動するエリア全体を1つの村とみなし、デレボアズを本拠地としてムフタルが置かれていた⁸。しかし、1936年にデレボアズからボダムヤ (*Bodamyı*) が行政単位として独立して、別にムフタルが置かれた。こうした動きは続き、さらにレンギュメ、イキズジェ (*İkizce*) と独立した後、

⁷ タシユアウルムアル (*Taşgölmüar*) アクムアル (*Akmüar*) キョルゲリムアル (*Körgerimüar*)、ギョクヤカ (*Gökyaka*) の4か所である。M. O. 氏の家系が使っていたのは、タシユアウルムアルだったという。

⁸ この説明は、前章でみた松原によるムフタル制の説明に一致する。

1961年には最も低地にあるヤルダーにゲレミシュが成立し、前節でも述べたようにM. O.氏などヨリユクの8家族が移住した⁹。

なお、デレボアズやボダムヤといった地名の語源はギリシャ語からきており、20世紀初頭まで多様な民族がアナトリアの長い歴史を反映したものであった。しかし、1963年にトルコ政府がこの地域の地名を「トルコ化」した結果、現在デレボアズとボダムヤはともにイスラムラール (*İslamlar*) に改称されている。ただし、日常会話では現在でも、デレボアズなど旧名が使われることも多い。

こうしてデレボアズ (イスラムラール)、レンギュメ、ヤルダー (ゲレミシュ) の間で移牧を行っていたヨリユクたちの共同体は5つの村に分かれていったが、現在でもデレボアズを中心とした1つの村だったという意識は強い。親戚や兄弟が暮らしていたり、別の村にも自分の土地や家を所有したりするものも多い。M. O.氏は、これらの村の結びつきの強さを「手の5本の指の関係みたいなもの」と説明してくれた。

また、1970年代半ばまでは、移牧を続けていたこともあり、5月の終わりにゲレミシュの住民全員がバランダ高原に移動し、ゲレミシュに戻ってくるのは12月の初めだったという。現在でも、M. O.氏をはじめとするゲレミシュのかつてのヨリユクたちは、デレボアズ (イスラムラール) にも家や畑を持ち、頻繁に行き来している。特に、引退して年金生活になった高齢者は、夏は涼しいデレボアズ (イスラムラール) で過ごし、冬は山間部に比べて温暖なゲレミシュで過ごすことが多いという。

ゲレミシュにおけるヨリユクの定住化は、松原が指摘したような、政府の定住化政策や農業の近代化による影響を受けている。ゲレミシュができて、ヨリユクたちが移住した背景には、1955年には政府が彼らにゲレミシュ周辺の土地を農地として提供したことが大きい。1960年代には、ゲレミシュからバランダ高原までの舗装道路の建設が行われ、村人たちも工事に参加し

⁹ これらの村の位置関係は、バランダ高原のデレボアズから、移牧のルートに沿って、レンギュメ、イキズジェ、ボダムヤ、海岸側のゲレミシュとなる。

たという。1967年に村で最初のトラックが購入された。村で自動車を使う者の数は増えていき、駱駝ではなくトラックが荷物の運搬に使われるようになった。舗装道路の整備と自動車の導入によって、半日もあれば、デレボアズ（イスラムラール）とゲレミシュを行き来できるようになった。農業についても、ゲレミシュが成立した1961年に、ドイツから技師が招かれてビニールハウス農業が導入された。こうした過程を経て、1970年代半ばまでに移牧を行う者は村からいなくなったという。

以上は、M. O.氏が自分たちの先祖について村の古老に聞いたという内容で、特に、遠い過去に関する内容は、はっきりしない部分や史実と合わないと考えられる部分もある。なかでも、彼らの祖先がアンタルヤ方面に移住するきっかけをつくったオスマン朝のジェム・スルタンなる人物が、メフメト2世の皇子ジェムであるとする、実在のジェム・スルタンは1495年にイタリアで死去しており、つじつまが合わなくなってしまう（林 2016）¹⁰。

ゲレミシュのヨリユクのマハッレは、1936年代まで存在したデレボアズ（イスラムラール）を中心にした共同体がそれにあたると考えられる。また、M. O.氏にアシレットについて尋ねると、彼はカラケチリ・アシレット（*Karakeçili aşireti*）と答えたのだが、テケ半島ではサルケチリ・アシレット（*Sarıkeçili aşireti*）のヨリユクが多いとする先行研究もあり、史的な裏付けはまだ得られていない（Bazin 1993）。

いずれにせよ、M. O.氏の語りからわかるのは、ゲレミシュに暮らすかつてのヨリユクたちの先祖は中央アナトリアからテケ半島に移動してきたということである。しかし、ここで注目したいのは、近年のゲレミシュにおいて進みつつあるヨリユクであった過去の見直しの動きの中で、ヨリユクの伝統がそれと直接的には関係のないようにみえる古代リュキア文化と結びつけられる傾向が強いことである。次章では、ヨリユクの伝統の遺産化について検

¹⁰ 実在のジェム・スルタン（1459-1495）は、中央アナトリアの総督を務めていたが、ビザンツ帝国を滅ぼしたメフメト2世の後継をめぐる兄のバヤズィットとの争いに敗れてヨーロッパに渡り、イタリアで没した（林 2016: 100-102）。

討する。

4. 遺産化する移牧の過去

ゲレミシュでの観光開発以前からこの村に暮らしている人びとがかつてはヨリユクであったことに筆者が関心を持つようになったきっかけは、2015年に彼らが「リュキア出身のヨリユク、パターラ (*Likyalı Yörükler Patara*)」という団体を結成したことである。古くは中央アジアから移動してきたヨリユクの過去と古代アナトリアに栄えたリュキア文化を結びつけた団体名それ自体が、古代からビザンツ帝国期までのイスラーム化以前のアナトリア諸文明の文化遺産を現代トルコの人びとがどのように捉えているかを研究してきた筆者にとって、非常に興味深い出来事だった。

この団体は、M. O. 氏を中心に、ゲレミシュやデレボアズ(イスラムラール)のヨリユクであった人びと 12 名のメンバーで構成されている。M. O. 氏のようなシニア世代だけでなく、20 代や 30 代の若い世代も参加している。主たる活動内容は、村民の結婚式や祭りなど村の重要なイベントの際に、ヨリユクの伝統衣装を身にまとい行進し、伝統舞踊ゼイベク (*zeybek*) を舞うことである。また、ゲレミシュの外に出て、カルカンやエルマル、フィニケなど近隣の市や町で行われているヨリユク祭 (*Yörük Şenliği*)¹¹ や、戦勝記念日などの祝祭行事にも積極的に参加している (図表 5)。M. O. 氏によれば、ヨリユクの歴史を村の若い世代に知ってもらうことを目的にこうした活動を始めたという。彼らの活動は、トルコ国内のマスメディアに取り上げられる

¹¹ ヨリユク祭は、参加者がヨリユクの伝統衣装を身にまとい、市の中心部を練り歩いたり、伝統舞踊を披露したりすることを通して、ヨリユクの伝統文化を再現する祭りである (T.C. Kültür ve Turizm Bakanlığı Antalya İl Kültür ve Turizm Müdürlüğü 2018)。ただし、現在のヨリユクのほとんどは、定住化して農業を営んでいる。2016 年 9 月初めに、筆者が参加したエルマルでのヨリユク祭では、グループ単位でのヨリユクの行進のあと、トラクターなど農業機械の行進が続き、農業機械の展示会といった趣も強いという印象を持った。

ようにもなってきた。

特に、M. O.氏は「リュキア出身のヨリュク、パターラ」の活動を始める前からヨリュクであった過去を積極的に再評価する取り組みを行なってきた。その1つが2003年から始めた「ヨリュクの行進 (Yörük Göçü)」である。これはトルコの観光週間にあたる4月の第3週の週末に行われている。ゲレミシュ郊外に残る、現地では「壊れた用水路 (*delikkemer*)」と呼ばれているローマ時代の水道橋跡から村の中心まで歩いていくイベントである。人間の赤ちゃんを1人、駱駝と驢馬を3頭ずつ、2頭の馬、家畜として山羊と羊を150頭ずつ連れ、ヨリュクが家畜を移動させていた様子を再現するもので、ゲレミシュの伝統文化を観光客にアピールする狙いもあった。ただ、すでに述べたように、ゲレミシュではもはや移牧は行われておらず、それだけの家畜を村内で集めることは難しい。そこで、近隣の村から家畜を借りてきてこのイベントを実施しているとのことである。「ヨリュクの行進」が始まった

図表5 エルマルで行われたヨリュク祭に参加した「リュキア出身のヨリュク、パターラ」



(撮影：筆者 2016年9月)

2003 年は、200 人ほどの参加者だったが、現在では観光客も含め、2,000 人近い参加者を集めるようになってきているという。

また、「リキュア出身のヨリユク」という団体名をつけたことについて、M. O. 氏は、「我々の祖先がこのあたりに来たのは後の時代のことだが、移牧自体は古代リュキアの時代から長く行われてきたものだ。我々の祖先は、この地域で行われてきた移牧文化を受け入れたからだ。」と説明する。M. O. 氏は、ゲレミシュの中心にある広場に、ヨリユクのチャドゥルを組み立てた（図表 6）。また、その隣にはこの地域の伝統的な木造倉庫を再現している（図表 7）。M. O. 氏によれば、こうした形状の建物は古代リュキアの時代から建てられてきたという。彼は、ヨリユクの伝統であるチャドゥルと、古代リュキア文化以来の木造倉庫の復元をゲレミシュの中心に並置することで、若い世代にゲレ

図表 6 ゲレミシュの広場に立てられたチャドゥル



（撮影：筆者 2016 年 8 月）

図表7 ゲレミシュの広場にある伝統的な木造倉庫の復元



(撮影：筆者 2016年8月)

ミシュの人びとがこれらを受け継いでいることを意識してもらうことを念頭に置いてしていると話した。

ゲレミシュにおけるこうした動きは、ヨリユクの過去の遺産化 (heritagization) と呼べるものだ (参考 Smith 2006; Poria 2010)。近年の文化遺産研究では、「遺産 (heritage)」という価値は、過去から受け継がれてきた有形・無形の文化に生来のものではなく、あとから付与された象徴的な価値であるという考え方が広く受け入れられている。遺産化とは、有形、無形の過去の痕跡を、それらに付与された「遺産」という象徴的価値をとおして自己アイデンティティに結びつけていく過程といえる。ただ、その過去の痕跡にどのような遺産の価値を見出すかは、当事者の立場などによって異なり、当事者間には様々な権力関係も生じている (参考 Smith 2006)。したがって、文化遺産は、単に保護の対象として客体化された何かというよりも、そうみなされた有形・無形の文化と、それをめぐる利害集団の交渉という社会

的な過程として見直されるようになってきている (Harrison 2013)。

ここで参考にしたいのは、文化の「資源化」の議論である (森山 2007)。森山工 (2007) は、文化がどのような形で「資源化」されるのか、その「資源にされる」動的な契機を明らかにする重要性を指摘する。特に、文化に新たな意味が付与され資源化される過程を、「誰が」、「誰の文化を」、「誰に対して」、「誰のものとして」といった観点からみていくことで、その文化をめぐる政治的、経済的、社会的諸関係を解きほぐせると論じる。

ゲレミシュにおいてヨリユクの過去を遺産として再評価する動きには、ヨリユクの伝統的生活を祖先から受けついできたものとして若い世代に伝える目的がある。つまり、ヨリユクとしてのアイデンティティの維持を目的とした、その伝統の資源化とみることができる。そして、その文脈でのヨリユクの伝統文化は、遠い昔に中央アジアから移動してきた遊牧の民としてのトルコ人の記憶だけでなく、古代から続くアナトリア文明の記憶も受け継いだものとして捉えられている (参考 田中 2017)。

その一方で、ヨリユクの伝統の再評価は、ゲレミシュの主産業の1つである観光との関わりからもみていく必要がある。特に、21世紀に入って安定的に経済発展を遂げてきたトルコでは、都市の富裕層が伝統的な生活文化を経験しに地方の農村に出かける観光のあり方に注目が集まるようになっていく。ゲレミシュから10キロほどのところにあるユズユミル (*Üzümlü*) 村は、近年、富裕層に長期滞在用に貸し出すヴィラが数多く建設され、ハイシーズンの7月や8月には、予約を取るのも難しいほどの人気ぶりであるという (参考 KanalIV comtr 2017)。

また、地中海地方を訪れる欧米人やトルコ中上流層の観光客の間で人気が出てきている観光のあり方に、「リュキアの古道 (*Likya Yolu*)」がある。「リュキアの古道」は、総距離540キロメートルのトレッキングルートで、このルートは、テケ半島に残る遺跡群を見どころとし、それらを放置された古代の道やこの地域にかつて多く暮らしていたヨリユクたちが家畜を移動させるために使った山道を結んで設定されている。このように、ヨリユクの「伝統」は、

都市部のトルコ人や欧米人観光客にとっての観光の魅力としても資源化されている。

5. おわりに

本稿では、トルコ地中海沿岸の観光保養地において現在は農業や観光業に従事する、かつての移動牧畜民ヨリユクを事例として、移牧をやめたヨリユクたちの「その後」の状況の例を報告した。季節移動をしながら牧畜を行ってきたヨリユクのほとんどは、政府の定住化政策や社会経済の近代化を通して、20世紀の後半には移牧をやめて定住化している。地中海地域のヨリユクの場合、定住化が進んだ時期と同時期に発展した観光産業に従事するようになったヨリユクも多い。その例として、ゲレミシュに暮らすかつてのヨリユクたちの現在の生活の状況や、ヨリユクであった過去の再評価の動きについてみてきた。

冒頭で述べたように、本稿はこれまでの調査結果の中間報告的なものであり、今後に向けた課題は多い。まず、定住化政策がヨリユクたちの生活をどのように変え、その文脈においてどのように観光に関わるようになったのか、ゲレミシュ村における状況について掴むことはできつつあるが、事実関係の確認も含め、今後の調査で明らかにすべき点もある。特に、ゲレミシュは、デレボアズ（イスラムルール）から分かれてできた村の1つである。M. O.氏はこれらの村の関係を「手の5本の指」に例えたが、具体的にはどのような関係なのか、村と村との間の通婚の状況なども含めて、さらなる聞き取り調査が必要であると考ええる。また、近隣にもこうしたヨリユクが定住化した村は多いし、ごくわずかではあるが、現在でも移牧を続けている人びともいることがわかっている。ゲレミシュ村周辺の状況についてもみていく必要がある。

これは、ヨリユクの過去の再評価の動きについても同様で、より広いトルコの社会的文脈からヨリユクの過去や伝統の捉え方について検討する必要も

ある。中央アジアから移動してきたというヨリュクの過去とアナトリアの歴史の関係をどう見るのか、ゲレミシュで行われている「ヨリュクの行進」など、ゲレミシュやその周辺で行われているヨリュクに関わる様々な行事に今後とも参加することや、ヨリュク関係の団体への聞き取り調査を進めていくことで、ヨリュクの過去の遺産化のあり様をより詳細に明らかにしていきたい。

謝辞

本稿のもとになったトルコでの現地調査の一部は、JSPS 科研費 26870789 の助成を受けたものです。

参考文献

- Aksoy, E. 2004 Günümüz Kırıkkale Karakeçili Yörüklerinin Aşiret Yapısı. *Türkiyat Araştırmaları (Hacettepe Üniversitesi Türkiyat Araştırmaları Enstitüsü)* 1: 165–178.
- Bazin, M. (translated in Turkish by Kara, H.) 1993 Orta Toros Yörüklerinden Sarıkeçili Aşireti *Türkiye Coğrafyası Araştırma ve Uygulama Merkezi Dergisi* 3, 323–350.
- Campbell, J. C. 1964 *Honour, Family and Patronage: A Study of Institutions and Moral Values in a Greek Mountain Community*. New York and Oxford: Oxford University Press.
- du Boulay, J. 1994 [1974] *Portrait of a Greek Mountain Village*. Limni: Denise Harvey.
- Harrison, R 2013 *Heritage: Critical Approaches*. London: Routledge.
- 林 佳世子 2016 年『興亡の世界史 オスマン帝国500年の平和』講談社
- Herzfeld, M. 1985 *The Poetics of Manhood: Contest and Identity in a Cretan Mountain Village*. Princeton: Princeton University Press.
- Işık, F. 2011 “*Caput Gentis Lyciae*”: *Patara Lykia Soyunun Başkenti*. Istanbul: Scala Matbaacılık.
- KanalV comtr 2017 Turizmin Yeni Gözdesi Üzümlü Mahallesi 8月21日
<https://www.youtube.com/watch?v=UeadBXpd7RY> (2018年1月7日閲覧)
- Keyder, Ç. 2003 The Consequences of the Exchange of Populations for Turkey. In R. Hirschon (ed.) *Crossing the Aegean: An Appraisal of the 1923 Compulsory Population Exchange between Greece and Turkey*. New York & Oxford: Berghahn, 39–52.
- Pitt-Rivers, J. A. 1971 [1954] *The People of the Sierra* [Second Edition] . Chicago and

移牧の過去の文化遺産化：トルコ地中海地方の定住化したヨリュクの事例から
Heritage-Making of the Semi-Nomadic Past in the Case of Yörüks Who Adopted Sedentary Life in Mediterranean Turkey (田中)

London: The University of Chicago Press.

Poria, Y. 2010 The Story behind the Picture: Preference for the Visual Display at Heritage Sites. In E. Waterton & S. Watson (eds) *Culture, Heritage, and Representation: Perspectives on Visuality and the Past*. London and New York: Routledge, 217-228.

Smith, L. 2006 *Uses of Heritage*. London and New York: Routledge

Tanaka, E. 2018 Archaeology Has Transformed “Stones” into “Heritage”: The Production of a Heritage Site through Interactions among Archaeology, Tourism, and Local Communities in Turkey. In A. Bain & R. Auger (eds) *Archaeology as Critical Heritage. História: Questões & Debates* 66 (1) , 71-94.

田中 英資 2017『文化遺産はだれのものか：トルコ・アナトリア諸文明の遺物をめぐる所有と保護』春風社

谷 泰 1996 [1976]『牧夫フランチェスコの一日：イタリア中部山村生活誌』平凡社

T.C. Kültür ve Turizm Bakanlığı Antalya İl Kültür ve Turizm Müdürlüğü 2018 Geleneksel Etkinlikler. <http://www.antalyakulturturizm.gov.tr/TR,176719/geleneksel-etkinlikler.html> (2018年1月6日閲覧)

松原 正毅 2004 [1998]『遊牧の世界：トルコ系遊牧民ユルックの民族誌から』平凡社

森山 工 2007「文化資源 使用法」山下晋司（編）『資源化する文化』弘文堂, 72-91.

